

## 言い伝えの日

華陽フロンティア高校 P N 完野 とまと

赤い土の上に、整然と並んだ白いビル群、ここで彼らは暮らしている。住民達は真面目に働きたりながら、楽しく日々を過ごしている。

ここに住む彼らは、朝も夜もよく働いた。この肥沃な土地で、多くの者が生まれ育ち、そして、その生涯を閉じていった。

住民達は初めからこの土地に住んでいた訳ではなく、厳しい環境から移り住んできた先祖達がこの土地を開拓して、ここまで発展させたのだ。

大地には、時折パチパチと慈雨が降り、ここに住む者達に活力を与えた。住民には一日三度の配給があつて、食べ物に困るなんてことはなかった。ここに住む者達は誰も彼も甘い物が好きだつた。豊かな食糧のおかげで、どんどん住民は増えていった。ここでの暮らしを誰もが謳歌していた。

——そんなある日、赤い土がさらに赤くなっていることに住民達は気付いた。気付いた時、「大地の怒りに触れてしまった」と彼らは口々に噂した。このことは住民の間で、大変な騒ぎとなつた。

彼らには、流浪の民であつた先祖から、代々伝わる言い伝えがあつたのだ。

「大地の怒りに触れたとき、まばゆい光とともに水が押し寄せ、けたたましい銀の稲妻が全てを破壊するだろう」

恐ろしい言い伝えに、誰もが震え上がった。

怒りによつて大地は赤く染まるのだらうと、皆揃つて考えた。この暮らしを続けるため、大地の怒りを鎮めようと、大地に優しい生活を送ることが叫ばれた。だが現実はそう上手くいかず、消費とそれに伴う汚染は生き物の定めであつた。彼らにはどうしようもなかった。赤みは少しづつ増していった。

——言い伝えの日はまだ来なかつた。彼らはこのままではいけないと思いつつ、懸念から目を逸らす日々を送つていた。それでもなお、彼らはより一層繁栄していった。言い伝えの日はいまだに來ないので、自然と言い伝えを支持する者と疑う者に考えが分かれた。活路を求め、この場所から飛び出していく者もいた。そんな時間が長く続いて、彼らはだんだん不安に慣れていった。比例するように、赤みはどんどん酷くなつていった。

——ある時、事態は急転した。誰かが、うっかり土の下に埋まっていた糸を切つてしまった時から、一日三度の配給が届かなくなつたのだ。暗闇に包まれた白いビルの中で、住民達は不安な夜を過ごした……。

辺りが少し明るくなつたようだ。住民達はやっと配給が來たのだと思い、喜んだ——。

——しかし、空に現れたのは、とてつもなく大きな目玉だつた。目玉は、彼らをじつと見つめている……。

「では奥にある虫歯を治療していきます。痛かったら左手を挙げてください」  
まばゆい光が、彼らを隅々まで照らし出した。

「言い伝えの日」終わり